



Title	「豚の国」で生きるということ
Author(s)	茶谷, 直人
Citation	哲学, 56, 45-66
Issue Date	2024-12-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95646
Type	departmental bulletin paper
File Information	56_t5.pdf



「豚の国」で生きるということ

茶 谷 直 人

1. 序：「豚の国」を真面目に考察すべき理由

プラトンの『国家』は独創的な国家論として広く知られている。そこで提示されるのは、「善のイデア」なるものを掴み遂げた哲学者が王となるかあるいは王がそうした哲学者となり、そのような君主（いわゆる哲人王）のもとで守護者階級・軍事階級・生産者階級がみずからの適性を発揮する仕方それぞれの本分を全うする理想国家（カリポリス＝うるわしきポリス）である。

しかし、こうした教科書的な概略紹介ではほぼ言及されることのない箇所が、この著作の中に存在する。それは、長大な理想国家論を開陳する前段階として第2巻において提示される、もう一つの国家である（369B-373D）。本書の登場人物としてのソクラテスが、ポリスの発生起源を考察する際に導入するその国家像は、カリポリス論に比べれば圧倒的に僅かな分量においてしか論じられず、しかも対話相手の一人であるグラウコンによって、そのような原始的な国家は「豚の国（polis hyôn）」（731D）と何が違うのかと嘲笑される。そしてそうした一蹴を受けて、あっさりと議論は中止・放棄されてしまう。そしてこの国家像は、それに続く長大なカリポリス論が開始されて以降は、対話が最終的に完結するまでほとんど顧みられることがない。したがってこの「豚の国」論は、通念的には（あるいは研究上のレベルにおいても伝統的には）、理想国家論の単なる前座か、あるいはカリポリスの素晴らしさを際立たせるための単なる引き立て役として扱われ、特に重視されることがない¹。

しかし、である。果たしてそんな風に簡単に一蹴してしまってよいのかと読み手を躊躇わせるだけの状況証拠が、テキストの中には少なからず見出される。まず第一に、「豚の国」という蔑称は、(対話篇の登場人物としての) ソクラテスとその国に住まう住民たちの生活様式について描写した内容を受けて、グラウコンが命名したものであって、ソクラテス自身が提唱したわけでも、またそうした呼称を是認したわけでもない²。それどころかソクラテスの評価は対極的な方向を志向している。すなわちかれは、対話相手が「豚の国」と蔑んだポリスを「健全 (hygieinê)」で「真正の (alêthinê)」ポリスであると称賛し、これに対して、豚の国に代わって導入され、最終的にはカリポリスへと結実することになるポリスを、「炎症を起こした・熱で膨れ上がった (phlegmainousa)」 「贅沢な (trypôsa)」ポリスであると表現しているのである (732E)。そして、私が本論で示すように、ソクラテスは豚の国に住まう人々の具体的な生活様式を徹底的に好意的な仕方でも記述し、ネガティブな表現を一言も用いてはいない。そしてもう一つ大事なことは、豚の国についての議論はそもそもソクラテス自身が進んで中断したわけではなく、グラウコンが話を遮えりその中止と「贅沢国家」論の開始を提案し、ソクラテスはかれの強い意向に沿ってあげただけのことである³。こうしたソクラテスの言葉と事の成り行きは、豚の国論を「前座」「引き立て役」として一蹴してしまう読み手の態度と、少なくとも表面上は明らかに調和していない。

とすれば、たとえ少数であるにしても、一部の研究者たちが提起する、「それなのになぜ豚の国論は放棄されたのか」(Green)「豚の国論に積極的な意義

¹ J. Annas, *An Introduction to Plato's Republic*. Oxford University Press, 1981.

² 以下、本稿の中で挙げられる「ソクラテス」という言葉はすべて、断り書きの有無に関わらず、「プラトンが描くソクラテス」(『国家』篇の登場人物としてのソクラテス)という意味である。なお、「豚の国を論じるソクラテス」が「歴史上の人物としてのソクラテス」とどのように関わるのかは、実は大きな問題なのであるが、現時点では私自身確実なことを言える術をもたないため、本稿では触れていない。

³ 本作品はフィクションである以上、こうしたものの言い方が滑稽なのは確かである。私が言いたいのは、そのように作者プラトンが描いた以上そこには何か意味があるだろうということである。

はないのか」(Rowe)といった疑問は、やはり問われるに値する疑問として尊重されるべきであり、プラトンの国家論、ひいては国家論一般に事柄として知的関心のある者にとっては、立ち止まって考えてみる価値のある問であると私は考える⁴。本稿も、このような状況を踏まえつつ、この問をめぐるさまざまな可能的吟味の一つとして起草されたものである。ただしここでは、私の能力と関心の限界に鑑みて考察の切り口を限定したい。豚の国をめぐるこれまでの——必ずしも盛んではないけれども一定数の論者によって展開されてきた——研究のほとんどは、私の理解する限りでは、対話篇中のソクラテスが提示する豚の国論を、『国家』篇全体の構想の把握、そしてプラトンの正義論と国家論の一般的理解、さらには国家のあり方と類比的関係にあるとされる個人の魂の理解を企てる上での手立て・媒介者として扱ってきた。すなわち、

-豚の国とカリポリスはどのように異なり、どちらがより優れたポリスである(とプラトンは考えている)のか

-豚の国に見出される正義はいかなるあり方をしておりそしてそれはカリポリスにおける正義といかに異なるのか

-豚の国における正義と類比関係にある個人の正義とは(もしそういったものがあるとすればとして)どのようなものか、そしてそれはカリポリスと類比関係にある個人の正義といかに異なるのか

-豚の国のあり方に類比されるような魂のあり方をプラトンは想定しているのか、しているとすればそれはどのようなものであり、理想国家と類比される魂のあり方といかに異なるのか

といった問題関心からの考察である。こうした大局的な見地からの考察は、プラトンの国家論・正義論・魂論ひいてはプラトン哲学全体を理解する上で当然ながら有益なものであり、深遠な哲学的関心がそこには遍在している。ただ一方で、そうしたある意味でトップダウン的な考察方法は、部分・小を知る上で

⁴ J. Green, 'The First City and First Soul in Plato's Republic', *Rhizomata*, 9(1), 2021, pp.50-83, C. Rowe, 'The City of Pigs: a Key Passage in Plato's Republic', *Philosophie antique Problèmes, Renaissance, Usages*, 17 Platon et la politique, 2017, pp.55-71.

予め全体・大を知っておかねばならない式のある種の解釈学的循環を孕んでおり、(少なくとも私にとっては) 当該箇所テキスト分析・考察を開始することを躊躇させかねないものであるように思われる。しかし、私の理解では、豚の国論は、その該当テキスト箇所(369B-373D)で語られていることそのものが、まずもって興味深い内容を含む——主観的な表現が許されるならば、魅力的な——ものであり、その議論を内在的に分析するに値するものである。例えば、昨今流行りの言葉である「持続可能性」の観点から、豚の国の構想自体を積極的に評価する研究も存在する⁵。しかし、そうした着眼点による考察を含め、テキストの当該箇所 でなされる議論の整理と分析そのものを主眼的に行う作業は、これまでさほどなされてこなかった。そこで私は本稿において、ひとまず大きな壁に向かう端緒的な作業として、当該テキストの全容を注釈的な仕方で分析し、そこで語られる社会像・国家像を整理・評価する作業を行いたいと思う。そしてそうした考察の上で、私の力が及ぶ範囲において、先行する解釈や今しがた挙げたような論点をめぐる解釈論争に可能な範囲で言及を行い、最終的に立ち向かうべき「大局的な視点」に対する僅かな寄与を実現できればと考えている。

2. 「豚の国」はこうして作られた

さて、まずはなぜそもそも豚の国の話題が対話の中で導入されるに至ったのかを確認しておきたい。『国家』におけるソクラテスと数名の知人による対話のテーマは、人間(個人)における「正義」(dikaiosynê)である。すなわち、

⁵ M. Usher, *Plato's Pigs and Other Ruminations: Ancient Guides to Living with Nature*, Cambridge University Press, 2020, Ch. 4. かれは、『国家』で行われる二つの国家の想定は、コンピューターによるシミュレーションやゲームにも準えることができる現代的な試みであるとして評価する。そして「豚の国」論については、持続可能な社会のモデルを描いたものであり、そしてそこでなされる、社会における共有資源(common-pool resource)の使用に関する社会的協力の議論は、経済学者エレノア・オストロムによる共有資源の研究・理論(資源の管理は、コミュニティが補完的役割を果たしたとき最も効果的となる)に類似していると指摘する。

ケパロスとの雑談に端を発したこの主題に関して、トラシュマコス、グラウコン、アデイマントスによるそれぞれの——ソクラテスとは異なる——正義理解が開陳される。そしてそれを受けて、ソクラテス自身が、かれの考える「それがもたらす結果において」だけではなく「それ自体として」よいものとしての「正義」の内実を対話相手たちに解き明かす必要に迫られる段階に至り（368A-C）、かれはその難題を、「国家の正義」という「大きな正義」を検討することを介して「個人の正義」という「小さな正義」を明るみにするという類比的手法によって実現しようとする（368C-E）。そうした考察手法について対話相手たちの賛同を得たのちに、かれはこう言う。

ソクラテス：「となると、ポリスが発生するさまをわれわれが言葉によって観想する（*theaomai logô*）ならば、ポリスの正義と不正義が発生するさまも見てとることができるだろうね」

アデイマントス：「はい、おそらく」（369A）⁶

このように、国家に存する正義から個人に存する正義を類比的に理解する企てのスタートラインとして、ポリスの発生活起源についての考察がソクラテスにより提唱され、対話者間で同意される。ただしこのポリス起源論・形成過程論はあくまで「ロゴス上の観想」であることにひとまず注意すべきであろう。すなわち、豚の国が次第に形成される過程の記述は、必ずしも原始時代におけるポリス成立の時系列的な記述・歴史的叙述を意図したものではなく、言論上・原理上の理論的な順序にしたがって述べたものであるということである。では、その論述順序の究極的な基礎を成すような最も根源的な基準はなんであろうか。ソクラテスはこう言う。

⁶ 本稿における『国家』からの引用については、読みよさを考慮して、ソクラテスを一人称とする原文の叙述形式から、ドラマのシナリオ形式に改変している。邪道に対し海容を請いたい。

ソクラテス：「私が思うに、ポリスが生じるのは、われわれのそれぞれは〔単独では〕自足しておらず、むしろ多くのものを欠いているからである。あるいは、何か他の原理がポリスを作るのだと君は考えるか」

アデイマントス：「いいえ何も」(369B)

ポリスが生じる根源的な原因・根拠は「われわれの必要性 (hêmetera chreia)」である。すなわち人間という生き物は、単独で生活するには「自足しておらず (ouk autarchês)」「多くのものを欠いている (pollôn endeês)」。そのため、一つの住まい (oikêsis) に協力者 (boêtês) と仲間 (koinônos) が集まり、それぞれが自分の利益のために (autô ameinion)、自分にできることを分け与え合う (metadidômi) ようになる (369B-C)。このことを、ロゴス上の観想がどのような順序でなされるのかと関連づけるならば、ポリスの成員は、生活のための「必要性」の度合いに応じて——すなわち生存のために最低限必要な（例えばまず最初は、明日まで生き延びるために必要なもの）から順に——語られてゆくことになると言える。最も必要なものは「栄養物 (trophê)」である。そして第二に必要なものは「住居 (oikêsis)」、第三に必要なものは「衣服 (esthês)」であり、これら衣・食・住にかかわる者として、農夫 (geôrgos)、大工 (oikodomos)、織物職人 (hyphantês)、靴職人 (skytotomos) がまずもって要請される (369D)。

ソクラテス：「さあでは、どのようにしてポリスは、それら〔衣食住〕を用意するのに足るだけのものとなるだろうか。農夫が一人、大工が一人、ほかに織物職人が一人ではないかね。あるいは、われわれはそこに靴職人や、身体にまつわる事柄のなにかほかの世話人を付け加えようか」

アデイマントス：「まさに」

ソクラテス：「では、必要最小限のポリスは4人または5人からなることになるだろう」

アデイマントス：「そう思われます」(369D-E)

かくして最初のポリスとはこれら4人（または5人）からなるものである⁷。これらの成員が最小共同体を結成するその行動原理・動機は、「自らの生存」という自己利益の実現にある。ただし、かといって利己主義な振る舞いが互いに交わされあうというわけではなく、むしろ逆に、自らと同様に単独では生存という自己利益を完遂できない者同士が協力し、お互いに助け合う（例えば農夫は自らの収穫物を、靴職人は自作のサンダルをそれぞれみなに分け与える）ことで、全成員における最低限の生存が確保されるという事態が成立する。すなわち、豚の国が成立するその端緒としてのこの「最小国家」の段階からすでに、「自身の生存・生活の維持という自己利益の実現のために各自が互いに利他的に振る舞う」という発想、「自己利益と他者利益・公益の調整」という合理的思考・知的な勘考が働いているのである。

これら4人の市民が相互扶助する際にもっとも気をつけるべき点はなにか。ソクラテスはこう言う。

ソクラテス：「各人は、全員のために共通の自分の仕事を全員に提供しなければならないのだろうか。たとえば、農夫は、自分一人で、穀物を4人のために用意し、4倍の時間と労苦〔労働力〕を穀物の準備のために費やし、他の人々と共有しなければならないのか。それとも、そんなことは気にせず、4人分の穀物の4分の1だけを4分の1の時間で作り、4分の3の時間については、家の用意のため、衣服の用意のため、サンダルの用意のためにそれぞれ3分の1ずつ費やして、他の人々と共有して事柄を持つことをせず、自分だけで自分のために自分のことをなすべきだろうか」

アデイマントス：「ソクラテスよ、おそらく、後者よりは前者の方がずっと

⁷ 「身体にまつわる世話人 (hoi peri to sōma therapeutên)」である5人目は、衣食住について最低限必要な人が順に挙げられるという議論の流れ、そして靴職人と選言で提示されることからすれば、「衣」に関わる何らかの従事者が想定されていると考えるのが妥当であろう。一方、sōma, therapeōという語が用いられるという事実のみに着目して、「医者」のことであると推測する読み方も可能であるが、議論の流れを考えれば不自然である。

より容易です」

ソクラテス：「神に誓って、それは道理あることだ。すなわち私自身も次のように思っている。まず第一に各人は、それぞれの人と本来全然似ていないのであって、むしろ、本性的に（physisにおいて）異なっており、人によって向いている仕事は違う。あるいは、君にはそう思えないか」

アデイマントス「私にはそう思われます」（369E-370B）

相互扶助のポイントはこのように、「それぞれが自分の向いている仕事に専念すること」である。人にはそれぞれ向き不向き・適性の違いがあって、それは「ピュシス」であるとソクラテスは言う。ここで言う「ピュシス」が純粋に先天的なものなのか、それともしかるべき訓練や生育環境により後天的に（「第二の自然」として）獲得されるものなのか、あるいは両方なのか（そしてその場合どの程度の比率においてそうなのか）といった問題は脇に置くとして、ともあれ事実真理として人にはおおむね「得意な分野」というものがあり、そうした仕事に専念して——つまり片手間ではなく、残余の仕事の労からは解放されて（370C）——その所産を自分のためだけでなく他の構成員と分かち合うことができれば、最も効率的・合理的な相互扶助が成立すると考えられている。そこに見られるのは、どのように相互扶助すれば最も効果的に自己利益と他者利益が満たされるのかについての合理的判断である。そしてこの知見は、豚の国論が中止されたあとに続く長大なカリポリス論においても、正しい国家が成立する基本的要件としての、「それぞれがそれぞれのことに専念する」という「専門化」原理として踏襲されることになる（eg. 433A-B）。ただし、豚の国とカリポリスが異なるのは、カリポリスにおいてはこうした専門化・分業は、それぞれの社会階層のレベルにおいて実現されるべきものである一方、豚の国においてはあくまで個人のレベルで語られている点であろう。

こうしてできあがった最小ポリスは、「生における必要性」についての一層の安定性と持続性（つまり「よりよいポリス」）を目指すとき、次の段階を迎える（370C-371E）。

- a) まず、衣食住のそれぞれについて、例えば食の場合、農作業のためには優れた農機具（例えば鋤）が必要となるが、優れた農機具を作るには農夫が自分の仕事の一部として片手間に農機具を製作すべきではなく、専門の青銅職人や木工職人がいたほうが望ましい。家の建築、織物製作、靴製作についても、同様の仕方でさまざまな分業とそれぞれの仕事に従事する専門家が必要となる。
- b) また、農地の耕作や建築資材の運搬、織物や靴を製作する原料としての羊毛や皮革採取のために牛や羊の飼育が必要となる、そのため、専従の牛飼いや羊飼いが必要になる。
- c) このようにして「もう小さいとは言えない」段階にまで成員が拡大したポリスにおいては、次に、他のポリスと交易（*emporia*）を行う必要性が生じる。すなわち、国内で不足する生産物を他のポリスから輸入する必要性が生じ、輸入品を国内で運搬する人が必要になる。輸入の対価として相手国が必要とする自国の生産物を輸出することが必要になる。すると自国分だけでなく輸出先のポリスが消費するのに量的・質的に十分なだけ生産を拡大する必要性が生じ、それだけ多くの農夫や職人が必要になる。輸出入の運搬・取引を行う専従者（*emporos*）も必要となり、とくに海洋貿易の場合には、造船、水夫、水先案内人などの多くの専門家が必要になる。
- d) 国内に視点を戻せば、生産物の広範な交換を可能にするために、取引の場である交換の場としての市場（*agora*）が必要になり。物品を交換のための徴として貨幣（*noizma*）が発明されるにいたる。ただし、市場や貨幣ができたからといって、生産者が市場に生産物を持ち込んでもすぐに必要な買い手が見つかるわけではない。しかし買い手が見つかるまで市場に長々と座り込めば自身の生産（*dêmiourgia*）を休むはめになり、その時間分生産が滞ってしまう。よって、買い手が見つかるまで代わりに市場に座り込んでくれる代行者が登場する。すなわち、生産者から一旦貨幣で生産物を買取った上で、貨幣と引き換えに生産物を必要なものに売り渡す人＝小売商（*kapêlos*）である。身体が弱く生産には向かない人がこれに従事する。ポリスからポリスを渡り歩く小売人の場合は「行商人」（*emporous*）と呼ばれる。

e) 一つ一つの仕事・生産を大規模で効率的な仕方で実現するために——（ソクラテス自身は明言しないが）奴隷ではなく——賃金労働者（misthōtoi）が必要になる。特に重労働を伴う仕事の場合は必須であり、思考（dianoia）は不得意だが身体が屈強な人々は、自らの身体の屈強さを重労働のために使用しその対価を賃金（misthon）として得て生活することになる。

3. 「豚の国」の生活様式が意味するもの

さて、ポリスが以上のような段階を踏んで拡大を進めたところで、ソクラテスとアデイマントスは次のことを同意しあう。

ソクラテス：「ではアデイマントスよ、われわれのポリスは完全なもの（telea）に達するまでに成長（auxô）しただろうか」

アデイマントス：「おそらく」

ソクラテス：「では、このポリスにおいて、どこに正義（dikaiosynê）と不正義（adikiâ）があるだろうか。そして、われわれが考察した人々のうちの誰のもとで、その参入と同時に「不正義が」生じたのだろうか」

アデイマントス「私は思い浮かびません、ソクラテス。それらの人々そのものの「＝それぞれの職種の内部での」相互的ななんらかの関わり合いにおいて「不正義が」見出される場合を別にすれば」

ソクラテス「おそらく君はうるわしく語っている」（371E-372A）

以上の発言についてまずもって注目すべきは、この段階にまで達したポリスは、その存続に関してもはやそれ以上・それ以外のものを必要とせず、自足的な状態を確保しているということである。そして、このポリス（豚の国）には「不正義」が存在しないことを二人は同意しあう。それはおそらく、このポリスにおいて各市民によって遂行される相互扶助が、もはや過不足がない形で均衡を保持しているがゆえに、（同業者同士は一種のライバル関係にあるため競争や一定の対立はあり得るにしても）それぞれの職業間や各種の取引におい

て詐欺、盗み、喧嘩、欺瞞といったものを行う必要がないということを意味しよう。あるいはそうした不正行為を行う誘惑が誰かのうちに少しでも芽生えたとしても、ミニマムな国家のスタートラインで既に存在していた「公益・他者利益のため、それを不当に損ねる仕方での自己利益の追求を回避する」（自己利益と公益の調整）という態度が、豚の国の住民の間に貫徹されているということであろう。

ソクラテスは、この国が「完全なポリス」であることを宣言した上で、この国に暮らす住民たちの生活様式を叙述してゆく。

ソクラテス：「このような状況に置かれた人々はどのような仕方です生活するのかを、われわれは考察しよう。かれらは、穀物やワインや衣服や靴を作る。そして家而建て、夏には多くの仕事を裸そして裸足で行う一方、冬にはしっかりと着込んで靴を履くのではないかね。そして、大麦からは大麦粉を挽き、小麦からは小麦粉を挽き、焼いたり捏ねたりして、素朴なケーキやパンを藁の葉の上や、他の清潔な葉の上に豪快に盛り付ける。そして、イバラやギンバイカを敷き詰めた藁のソファに横たわり、自分たちと子供たちで食事を楽しむ。食後にワインを飲み、冠をかぶって神々の讃歌を歌い、互いに心地よくすごす。戦争や貧困に陥らぬよう注意するので、子供の数はあくまで自分たちの財力を超えない程度にとどめておく」

グラウコン（話に割って入っての発言）：「どうやらあなたは、主菜・おかず（opson）なしに人々に宴を催させようとしていますね」

ソクラテス：「君の言う通りだね。彼らが主菜も食べるはずであることを私は忘れていた。塩やオリーブやチーズも食べるだろう。また、畑にある、煮物の材料になるような根菜や葉野菜を、煮込み料理にするだろう。また、それらにいちじくやひよこ豆やその他の豆を添えるだろう。またかれらは、適度に酒を飲みながら、ベリーや木の実を火で炙るだろう。そしてこのようにして、平和のうちに健康な状態で（en eirênê meta hygieiâs）に生を送り、おそらく老年まで生を全うし、そうした生活様式を子供たちにも受け継がせ

てゆくことだろう」(372A-D)

ここでソクラテスが描き出す豚の国のライフスタイルは、形式上はあくまで「列挙」であり、そこで挙げられていない事柄が採用されていないことの証明にはならない。ただし、この箇所の後続する、豚の国から一線を越えた「贅沢国家」の段階になって初めて登場するものとしてどういったものが列挙されるのか(372E-373D)をも含めて総合的に考えれば、「豚の国にはなにがあってなにが無いのか」はある程度必要十分的に確定することができる。こうした点を踏まえながら、まずは衣・食・住のそれぞれについて豚の国のライフスタイルを整理してみたい。

衣：豚の国の住民は、自らの仕事や普段の生活において支障をきたさない（特に、冬季に苦痛や不便を感じ無い程度の防寒性を備えた）衣服を身につけて生活している。衣服に刺繍や装飾を施したり、金などの貴金属、象牙などの装飾具を身につける慣習は贅沢国家の段階で初めて導入される。香油を塗る習慣も存在しない。ただし宴の際に冠を被ることはある。

住：住居が建築されそこに住まい、家具や食器類は草などの植物の茎や葉を材料にしてシンプルなものが制作される。ただし、複雑に加工した寝椅子などの家具は用いられない。

食：主食には大麦や小麦を挽いた粉を原料とするパンが採用され、主菜（opson）としては——グラウコンは肉や魚の「ご馳走」という意味でこの言葉を使ったつもりだったのだが⁸——各種の葉野菜や根菜の煮物、オリーブ、チーズなどが食されることになる。付け合わせとして豆類や無花果などが供される。食後

⁸ opsonは主食に対する主菜を基本的には意味する。ただ、そこで通常人々が思い浮かべる料理は肉料理か魚料理（特に肉料理）なのであろう。グラウコンは「肉や魚のご馳走はないのか」という意味合いでこの言葉を用いたのに対して、ソクラテスは（もちろんそれはわかった上でわざと）純粹に「主菜」という意味で了解し、豚の国においてふさわしい主菜を挙げたものだと考えられる。

にはベリー系の果実やナッツ類が炙って供され、ワインがそうしたつまみや同席者との歓談、歌唱とともに——あくまで適度に——楽しめる。一方、肉や魚は食されない。調味料やスパイスは多用されず、菓子類も凝ったものは作られない。

これらのうち、「衣」と「住」に関しては手がかりとなる記述の絶対量が不足しているため、この論考で何かはっきりしたことを述べるのは難しい。しかしその一方で「食」については、われわれは豚の国における食生活をかなりの程度イメージすることができるだろう。また、グラウコンがこの国を「豚の国」と蔑んだのも、ソクラテスがここで述べた食生活を耳にして「豚の食べる餌とどこが違うのか」という趣旨でのものである以上、とりわけ食生活こそが豚の国の生活様式を考える上で重点的に吟味すべきものであると言えるだろう。

まずはっきりしているのは、豚の国で採用されるのは緩やかな意味でのヴェジタリアニズムであることである。（われわれの語彙を用いればということだが）タンパク質は、豆類やチーズなどの乳製品のみから摂取され、肉や魚は（全く食されないのかどうかはともかくとして）基本的に食卓に載ることはない。付け合わせやデザート類も然りであり、ベリー系の果実やナッツ類、穀物を用いたケーキなど、植物系・果実系の自然な甘味を持つ菓子類のみが楽しめることになる。

では、なぜそのような食習慣が採用されるのであろうか。現代の菜食主義者であれば、それを採用する人々が有する理由は、動物の権利保護、信仰上の禁忌、環境問題への関心など多種多様であろう。では、ソクラテスの提示する理由はなんであろうか。かれは、必ずしも「理由」として明示的に挙げているわけではいにしても、こうした食生活を採用することでどのような有益な事態が実現されるかは、明快に提示している。すなわちそれは、「健康 (hygieia)」と「平和 (eirênê)」の二つである (372D)。どういうことか。まず、「健康」については多言を要しないであろう。過度な肉食が健康な生活を害するリスクがあることは、栄養学などの科学的な知識が確立されていようまいと、現代

であれ当時であれ人々の間で経験的に了解されるはずのことである。実際ソクラテスは、豚の国から贅沢国家へと一線を踏み越え、肉食を中心とする食生活を人々が採用することになってしまえば、不健康な人が続出し、豚の国ではあまり必要のなかった医者が存在が多数必要になるはずだと明言している(373D)。

では、「平和」のためとはどういうことであろうか。これも、豚の国に留まっていれば生じなかったところの、贅沢国家に新たに見出される事態の記述を手がかりにすることができる(372B-374A)。そこから判断するに、(かれの主張の趣旨を汲んで私が若干の肉付けをほどくことが許されるとして、それを伴いながら説明すれば)ソクラテスは次のように考えている。市民が主菜として肉食を採用するならば、自分自身で狩猟を行うか、あるいはどの市民も自身の仕事に専従しているため自給自足には限界がある以上、動物を狩ることを専門とする一定数の猟師たちが必要になるだろう。しかし、時折(たとえば週に1、2度)ではなく肉食を中心とする仕方での主菜摂取が社会的に導入されるとすれば、それだけでは(特に野生動物の個体数を考慮すれば)とても需要を満たすことができないため、食用のための家畜の広範な飼育が行われることになる。そして、飼育する家畜を統率するための作業動物(牧羊犬など)も必要になるだろう。また、家畜の広範な飼育と、飼料の確保のためには広大な牧草地や耕作地が必要となる。かくしてポリスを持続させるために必要な国土面積が一気に拡大し、やがてはポリス内の既存の領地では手狭になってしまう。となると、広範な放牧や耕作のために、隣のポリスの領地を「切り取りとる」(＝占領する *apotemnô* 373D) 必要が生じてくる。しかし、その隣接する「切り取られる」側のポリスも事情は同様である。すなわち、これまた同様に肉食中心の食生活(をはじめとする贅沢な生活様式)を採用しはじめた隣のポリスは、自国の民たちの拡大する欲望を充足させるために、隣の領地を占領する必要に迫られている。かくして不可避免的に生じるのが、無際限な欲望同士の暴力的な衝突としての「戦争(*polemos*)」である(373E)。すなわち、裏を返した仕方で述べるならば、ソクラテスの考えでは、平和な社会の維持(戦争の発生の

回避)のためには、食用家畜の広範な飼育を必要とするような仕方での肉食を社会的に控えることが必要であるということになる。そして、「豚の国」ではまさにそうした戦争が回避され、平和の維持が実現しているのである。以上からすれば、「平和の維持」を豚の国における生活様式の所産として挙げるソクラテスの趣旨は、健康と並んで平和の実現こそが緩やかなヴェジタリアニズムの「理由」であるという知見を含んでいるとみなしても差し支えないであろう。ちなみに、先の引用で述べられていた、戦争に陥らぬよう子作りをコントロールするという記述(732B-C)からも、戦争を回避するために人口を抑制するという態度を看取することができ、食生活についてのソクラテスの趣旨と合致している。

となると、肉食を主菜として採用することによる害悪のポイントは、必ずしも肉を食べるという行為そのものに帰せられている——例えば動物を殺めたり苦痛を与えてまでそれを食すのは道義上問題があるとか、肉という味覚的にインパクトの強いものを食べるのは過度に快楽主義的で放蕩な行為であるとソクラテスは考えている——わけではないということが察せられる。すなわち、「健康の維持」という観点を含め合わせて考えても、回避されるべきであるとソクラテスがみなしているのはあくまで過度の肉食であるはずである。すなわち具体的に言えば、野生動物の狩猟や魚釣りなどによって得られる程度に肉(いわゆるジビエ)や天然魚を用いた料理を時折——例えば週に1、2回程度——嗜むことを超えて、豆類を「味気がないもの」と毛嫌いし、組織的な食用家畜の飼育や飼料の生産を必要とするほどにまでタンパク質の摂取を肉食に頼ってしまうような食生活が、害悪のポイントであると言えるだろう。ちなみにもう一つ付け加えるならば、ソクラテスは豚の国論においても贅沢国家論においても、魚についてはテキスト上は一度も言及していない。このことは、肉類と違い魚介類の摂取については、それを頻繁に摂取したとしても「不健康」や「戦争」をもたらすわけではないという知見をプラトンが保持していることを示唆する。このことは、戦争の問題はともかくとして、魚の摂取とヘルスケアの関係性について現代のわれわれに一般的に認められている栄養学的知見とも合致する

(が、これはあくまで示唆にとどめておきたい)。

さて、以上からすると、「健康」の観点にせよ「平和」の観点にせよ、豚の国において実質的あるいは社会制度的に避けるべきだとソクラテスが主張しているのは、食用家畜の飼育（そしておそらく魚の場合は魚の養殖）である、と私は考える。そのように考えるならば、チーズなどの乳製品は動物性食品であるにもかかわらず摂取可能なリストに加えられていることとも辻褄が合うのではないだろうか。すなわち、直接の飲用にせよ、チーズやバター、ヨーグルトなどの加工品にせよ、野生の動物、あるいは労役用の家畜がもたらしてくれる乳を結果的に人間が利用することは——おそらくは鶏の卵なども含めて——禁忌とされてはいないし、それどころか、健康の維持と味の追究のためには推奨されており、だからこそ「健康」で「真正」なポリスでは採用されていると考えても決して不条理ではないであろう。

以上のように豚の国における食生活のあり方とその意義を捉えてみたとき、食に比べ言及の少なかった「衣」と「住」についても、おおむね同様の線で一定の推測が可能ではないだろうか。まず「衣」については、豚の国では寒さや暑さをしのぐといった衣類の基本的な機能が満たされるもののみが製作される一方で、贅沢国家においては、衣服への刺繍などの装飾、金や象牙などを原料とする装飾品、香油、意匠を凝らしたヘアスタイルなどが導入されるにいたる(373A-C)。また「住」については、前者においてはイバラなどの植物の茎や葉を材料とした家具や食器が用いられる一方、後者の国においては材木による一層複雑な家具（寝椅子、テーブルなど）が生産されることになる(373A)。以上の点に関して、食生活におけるこれまでの検討と重ね合わせることで言うであろうのは、豚の国における衣・住と贅沢国家におけるそれらの決定的な違いはおそらく、植物（綿や麻など）の栽培・収穫や、材木の伐採・植林、羊毛や皮革の採取などが、前者においてはあくまで自国の内部で完結する程度に行われる一方で、贅沢国家においては、戦争という暴力行為によって他国に侵攻し領地を占領・拡大しなければ供給が追いつかない程度になされるということであろう。豚の国と贅沢国家におけるそれぞれの生活様式は、衣食住のい

ずれに関しても、その維持が近隣国への侵攻を伴いうるものであるか否か——戦争の回避・平和の維持という仕方によってに持続可能な社会が成立するか否か——という点で袂を分かつものである、そのように私は考える。

4. 「豚の国」論をどう考えるか

さて以上のように、豚の国における生活様式とその意義についてのテキスト内在的な検討をおこなったいま、そこで得られた知見に照らしてなにかを有効に語りうる限りで、豚の国論をめぐるこれまで提示されてきた解釈について、一定の評価と、それらに対する私の理解の差別化を試みておきたいと思う。

まず言えることは、豚の国における住民の生活は、「華美ではない」と——あるいは百歩譲って「質素」であると——表現することはできるとしても、決して「粗末」なものではないし、過度に禁欲的なものでもないということである。従来、豚の国はいわゆる「黄金時代 (Golden Age)」的な空想の産物であり、原始的で牧歌的なユートピア世界がそこでは描かれているとの解釈が一部でなされてきた (Annas)⁹。しかしソクラテスの描写する豚の国は、労働が存在しない黄金時代の牧歌的世界とは異なり、各自が自らの適性に即した仕事に従事し、その所産を相互扶助的に分かち合う共同体である。また、豚の国の住民は「原始時代の人々」として描かれるようなプリミティブなものとは一線を画している。この国の住民たちは、パンを主食、豆などの植物を用いた食品やチーズなどの乳製品を主菜とし、野菜を十分にとり、デザートとして果実を炙った食生活を送る。そしておそらくは、家族や知人が狩った獲物や釣りの成果も時折は楽しむだろう。そして、ワインがある。酒のつまみや家族・友人たちとの歓談と共にそれを満喫する。穀物、豆、野菜などは自給自足しなければならぬわけではなく、アゴラにいけばさまざまなものが手に入る。外国との交易も盛んであるから、近隣諸国の珍しい品物も入手することができるだろう。「肉が満足に食えないで豆ばかりなのは貧相で粗末」だと現代の人々の多くは訝るか

⁹ J. Annas, *op.cit.*

もしれない。しかし、「豆よりも肉の方が美味である」「豆は「質素」で肉は「ごちそう」だ」などという判断がどのような客観的根拠から成立するというのだろうか。豆には豆の美味しさが、野菜には野菜の美味しさが、肉には肉の美味しさが、「こちらのほうが優れている」という比較評価を客観的に下せるものではない。「いや、肉の方が美味しいに決まっている」と断言する人がいたとすれば、それは、肉食（そして贅沢国家の肉食で多用される強いスパイス類）のもつ味覚的なインパクトの強さに慣れ切ってしまい、豆や野菜や無花果の穏やかな味わいを正當に味わうだけの審美眼が麻痺してしまっただけだと反論することができるだろう。（そしてこのことは、「肉」と「魚」の関係にも——つまり「魚より肉の方が美味しいに決まっている」と言い張る人がいたとした場合にも——あてはまる。）

次に、豚の国に正義が成立しているのは、住人たちが衣食住にかかわる欲求を偶然的にコントロールできているだけのことでありという解釈が存在する(Barney)¹⁰。すなわちそれは、のちのカリポリス論において提示される魂の三部分説に照らして表現すれば、欲望的部分が、知的部分による支配下におかれることによってではなくたまたまうまい具合に自己統御しているだけのことであり、そうした状態はいつか崩壊し、人々は必要な欲望から不必要な欲望まで手を広げてしまう（cf. 558D-559D）だろう、という考えである。こうした考えに対しては、そもそも魂の三部分説がグラウコンにせがまれて開始されたカリポリス論で提示されるものである以上、三部分説的な語彙を用いて豚の国論における魂のあり方を記述すること自体に限界があるのではないかと難じることもできよう。とはいえ、こうした解釈は作者プラトンが豚の国を放棄しカリポリス論を導入した理由としても機能するため、一定の魅力を有してはいる。しかしながら、既にGreenらによって指摘されているように、そもそも豚の国が生じたその端緒に存在する、お互いの自己利益の維持のために互いに利他的

¹⁰ R. Barney, 'Platonism, Moral Nostalgia, and the 'City of Pigs'', *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 17, 2001, pp. 207-27.

に振る舞うという発想、そして自己利益と他者利益のバランス保持のための合理的計算は、知的な思案・勘考によってこそないうるものであり、「欲望的部分の自己統御」と呼べるものではないであろう¹¹。また、私が前節で示したように、健康の維持と平和の実現（戦争の回避）を見据え、衣食住（特に食）にかかわる自分たちのライフスタイルを個人的かつ制度的にも定めてゆくという発想は、高度な合理的思考の産物以外の何物でもないはずである。

以上のように豚の国の市民たちはみな合理的な勘考を行い、そこには理想的な仕方での正義と平和が現に成立しているとしても、やはりつきつめれば次のような疑問は残るかもしれない。ソクラテスが描写する豚の国においては、住民たちがお互いが利他的にふるまい合うことで調和的な相互扶助が成立している。ただしそのような円満な協力関係は、元をたどれば、「自分だけでは多くのものを欠いている」状況で、自分の利益（*autô ameionon*）のために構築されたものである（369B-C）。このように、各人の行為を支配する究極的な原理が利己主義にあり、人々の友好関係があくまで手段的な性格なものであるとすれば、何らかの状況の変化により有用的な関係が損なわれ、互いの利害関係が一致しない事態が生起すれば、協力関係には容易に崩壊してしまうのではないか。このような解釈（McKeenら）に対してわれわれは何が言えるだろうか¹²。

まず、人間は究極的には利己主義的な存在者であるか否かという少なくともここでは収集のつかない問題は脇に置くとして、杓子定規で身もふたもない応答をすればこうなるだろう。（プラトンの描く）ソクラテスは、豚の国には不正が存在しないと明言しているのだから、とにかく彼は、豚の国で採用される生活様式を踏み外した生活様式が導入されない限り、人々は自己利益と他者利益のバランスを保持した振る舞いを遂行し、円満な協力関係も崩壊したりはしないと考えているのだと。もちろんこれだけでは、応答者が権威の盲従者であることを告白しているだけにすぎない。とはいえ、ではなぜソクラテスはその

¹¹ Green, *op.cit.*

¹² McKeen, 'Swillsburg City Limits: The 'City of Pigs': Republic 307C-372D', *Polis* 21, 2004, pp. 70-92

ように断言できるのか、その根拠はなんであるとかれは考えているのかを察してみようとするのは、無意味でないはずである。私が注目したい点は、結局はこれまでの論述を別の仕方でも繰り返すことになるかもしれない。確かに、豚の国のプロトタイプとしての、大工、農夫、織物職人、靴職人の4人からなる最小国家が結成された目的は、自己の最低限の（例えば明日まで生き延びるという意味での）生存という各人のニーズであった。ただ、そこからより安定かつ効率的でうるわしい（kallion）生活の実現へと人々の眼差しは移り、衣食住に関してさまざまな分業が進み、交易が行われ、市場や貨幣が誕生し、小売制度や賃金労働者が登場するにいたった。そしてそのような成長を遂げたポリスをソクラテスは、その存続の上でそれ以上でもそれ以下でも不適切であるような、必要十分的に自足した「完全な（teleia）ポリス」であるという最高の賛辞で表現する。そしてこの「完全な」状態に達したポリスにおいては不正義が存在しないと述べ、また、そこでの生活様式を語るさいには、人々は「健康」と「平和」のため（すなわち不健康と戦争を回避するため）に、他国への侵攻の必要がない程度の生活様式を採用していることを指摘したのであった。私が強調したいのは、この「完璧な」ポリスにまで発展した段階においては、当初の「自己の生存」というレベルでの自己利益追求という動機あるいは理由だけではなく、健康な生活と戦争のない社会の実現というより高度な——とくに後者については公共性と普遍性を有する——目的が公的なレベルで設定されるに至っているということである。ソクラテスは、単純な意味での自己利益に加えこのような普遍的原理に導かれて生活する市民たちによって構成された国家であれば、「完全」で（少なくとも容易には）調和が崩壊することのない共同体であるとみなすことができると考えていたのではないだろうか。

5. おわりに

さて、以上で私は、プラトン（の描くソクラテス）が『国家』篇の中で提示した「豚の国」について、周辺的な関連事項を敢えていったん度外視し、当該のテキスト箇所そのものを注釈的に分析することで、どのような国家として語

られそこでの生活様式がどのような内実と意義を有するのかを論じてきた。そこで浮かび上がったのは、戦争の生起を回避し平和を維持するという意味での持続可能性を備えた、特徴的な生活様式（特に食生活）であった。そして、市民一人一人が、ヒエラルキーの存在しない（さらには奴隷制度も、そしておそらくはあからさまな性差別も存在しない）対等な関係のもとで、共通の目的のために自らの適性を発揮すること——つまり一人一人のうちに正義が成立すること——が叶い、なおかつ全体としても正義が成立している、そのような社会であった。こうした国家像・社会像は、戦争を回避し平和を維持することが社会における最大の課題であるという知見に賛意を表する人間がこの社会に存在するとすれば、そうした人々——私もその一人であるが——にとっては控えめに言って魅力的で教訓的な内実を有していると言えるだろう。本稿で回避した諸問題——カリポリスと豚の国の関係・違い・優劣、豚の国が放棄された理由、豚の国に類比される魂理解（がそもそも存在するのか、そして存在するとすればいかなるものか）、ソクラテスの魂論とプラトンの魂論の異同等——はあまりにも多くそして大きいが、本稿が、それらとは別の角度からの論考としての、あるいはそうした問題を考える上での予備作業としての意義を僅かでも有していることを、ある種の弁明を兼ねて祈念しておきたい。

ところで、「豚の国にとどまり続ける社会」も「豚の国から贅沢国家への一線を踏みこえる社会」も、可能世界（可能社会）としてはどちらもありえたのだろう。ただ現実には人間は、歴史を振り返る限り、後者の道を選ぶことになった。「完全な豚の国においてはそれはありえない」というソクラテスの考えは、残念ながら間違いであった。そして一旦その限界を踏み越えてしまえば——すなわち歴史上最初の戦争が起こってしまえば——、パンドラの箱のように、もう豚の国に後戻りすることはできないのだろう。そして、もちろんプラトンもソクラテスも、われわれと同様にこのことを歴史的に経験した人物であった。あとはもう、カリポリスしかない——プラトンはそう腹を括ったのかもしれない。われわれは、どうだろうか。

[付記] 本稿が、我が師である千葉恵先生の退職記念号に掲載されることを、僭越の念を伴いながらも光栄に思います。他ならぬ千葉先生の記念論文でありながらアリストテレスを扱うものではなかったことの無礼と無粋をお許してください。私は北大の学部生時代に、当時着任直後だった千葉先生に出会い、それ以来、必ずしも優れた弟子でも誠実な弟子でもなかったにも拘わらず、公私共に——自分自身の思い出としておきたいため、この場での具体的な列挙は控えることをご容赦ください——さまざまな薫陶を受けることが叶いました。千葉先生のような卓越したそして唯一無二の個性——たとえば、先生を知る方なら分かっていただけるかと思います——を備えた存在は、（少なくとも日本における）大学の中では、この先もう現れることはないのかもしれませんが。その意味でも、札幌を「北のアテナイ」だとすれば、千葉先生はアリストテレスというよりはむしろソクラテスのような存在だと私自身は思っています。